

国 語 科

「書くこと」を利用して「読むこと」を深める授業の創造

—古典学習を中心に—

實 谷 富 美

1. はじめに

「読むこと」は考えることである。「読むこと」は、書かれていることをとらえながら、書かれていないところまでを想像する力をつけることであると考える。

東京学芸大学の熊徹は「読む力と書く力、なぜ転移するのか」¹⁾において次のように述べている。

「書く力には図のような三つの層があると考えている。

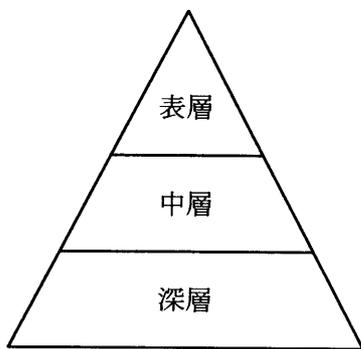


図1 書く力の層

表層は、一般的に書く力と言われているもの。すなわち、学習指導要領の書くことの指導事項に相当する主題力、取材力、構成力、記述力、推敲力などである。書く力の中心的なものと考えられがちであるが、これらが書く力の全体に占める割合は図のごとく氷山の一角程度でしかない。にもかかわらず、書くことの指導はこの表層の書く力に対してなされることが多い。単なる表層の書く力に対する指導は、抜本的療法ではなく、対処療法にしかならないのである。中層の書く力は、表層の書く力の基盤を形成する力である。いわば学

習指導要領の〔国語の特質に関する事項〕に相当するものである。書字力、語彙・語句力、表記力、文法力、文・文章構成力等々である。そして、深層の書く力である。表層及び中層の書く力の基盤を形成する大事な力である。書く力の最も大きな部分を占める力である。具体的には現在子どもたちに育成すべき重要課題とされている思考力、判断力、観察力、知覚力、感受性、表象力などの認識諸能力である。さらに具体化すれば、自ら課題を発見し、深く多様に思考をめぐらせ、判断したり、認識したりする認識諸能力、さらに感受性鋭く観察し、知覚し、思考し、判断したりする力である。書くことへの関心・意欲などもここに位置付く。文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』の中核となる四つの国語力もこの深層の書く力と重なるものである。書くことの指導は、とりわけ大事な基盤である深層の書く力をこそ育てるべきなのである。具体的な指導は、例えば、書くことへの関心、意欲を喚起するような交流活動を展開したり、また、思考力、判断力等を育成するために、習得した知識・技能を日常的に「活用」し、子どもを取り巻く日常生活の課題等を解決したりすることである。次に読む力であるが、筆者は、読む力にも書く力と同じような三層構造があると考えている。表層は、学習指導要領の指導事項に相当する読む力。中層は、学習指導要領の〔国語の特質に関する事項〕に相当する読む力。そして、深層は、書く力の深層と同様な、思考力、判断力、観察力、知覚力、感受性、表象力などの認識諸能力、それに関心、意欲である。たくさん読むことによって表層、中層の読む力はもちろんのこと、深層の読む力も育つの

である。書く力も読む力も深層は同じ、思考力、判断力、観察力、知覚力、感受性、表象力などの認識諸能力、それに関心、意欲などである。書く力と読む力は深層においてほぼ重なるのである。重なっているから、読む力は書く力に転移するのである。」

国語科の学習指導要領において「話すこと・聞くこと 書くこと 読むこと」という領域の区分はあるものの、実際に授業する際には一つずつの領域に線を引きながら学習することはできない。あらゆることが複合的に重なり合って理解が深まっていくのである。まさに大熊氏が述べている通りだと考える。「読むこと」は各人の思考を促すものであり、同時に「書くこと」のベースともなる。

そこで今回は、「書くこと」を積極的に利用しながら「読むこと」を深めていく取り組みを考えた。また、その際には、子どもたちが苦手意識を持っている「古典」に着目し、「古典」を難しいもの・わけの分からない世界でなく、現代に通じる「読み物」として身近に感じさせることができるよう試みた。

2. 授業の概要

(1) 対象 中学校3年生 83名

(2) 教材 学校図書 中学校国語3

「おくのほそ道」「枕草子」

(3) 授業構成 (全12時間)

- 第1次 おくのほそ道・松尾芭蕉の概略を知り、学習の見通しをたてる。・・・1時間
- 第2次 各行程における芭蕉の気持ちを考える。(芭蕉日記を書くことを通して読みを深める。)・・・5時間
- 第3次 枕草子・清少納言についての概略を知り、学習の見通しをたてる。・・・1時間
- 第4次 各段の大意を把握し、枕草子の文章の特徴をつかむ。・・・3時間
- 第5次 口語訳の書き換えを行い、言葉の効果を考える。・・・1時間

第6次 文体の工夫を意識して、オリジナル作品を書く。・・・1時間

(4) 授業の実際

〈第2次 各行程での芭蕉の気持ちを考える。〉

現代語訳を参考に、旅に憧れた芭蕉の気持ちを考えさせた。そして、「前の旅から帰ってきたとき」「大掃除をしていたとき」「松島の月を思い浮かべたとき」「家を処分したとき」「旅立つ直前に以前住んでいた家を訪ねたとき」「いよいよ江戸を離れるとき」など、場面設定を自由に選ばせてとして『芭蕉日記』を書かせた。基本的な枠組みは外さないことを最低条件とし、文体も自由、内容にオリジナルを加えて良し、俳句はそのまま使ってもオリジナルな俳句を創作してもよいという緩やかな条件のもとで行った。

生徒たちの取り組みぶりとしては、書くのには意外と時間がかかっていた。しかし、どの場面が一番自分にとって書きやすいか、そのときの芭蕉の心境はいかなるものか等々、悩みながらも一度作品を読み直すことで、一つ一つの言葉の意味を味わうことにつながったと言える。例えば、日頃書くことや読むことを得意としていないある生徒が書いたものは、最後の2文が敬体になっていた。理由を聞くと、「遺書のつもりで書いたので、そこは他人に読まれたときのことを考えて変えた。」と答えた。文章の完成度としては拙いものであるが、そこには彼のはっきりとした意志があり、芭蕉の覚悟を深く反映させたものを書くことができたと評価できる。本文を読んだだけでは、その思いにまで至らなかったと考える。以下はその生徒の『芭蕉日記』である。

表1 芭蕉日記1

旅の前夜	
	私はまた旅に出ることにした。あのとても楽しい旅へ。今度は私の憧れていた西行さんや宗祇さんたちのように旅で死んでみようと思う。もう私もいつ死んでもおかしくない年になってしまったからな。だけど松島の月は死ぬまでに一度見て

みたいものだ。あの美しそうな松島の月は、とてもきれいだろうなあ。

今回の旅で絶対に見ようと思います。では、明日からの旅に備えてもう寝るとします。さようなら。

また、別の生徒は次のように書いている。

表2 芭蕉日記2

帰宅

家へ帰ってきた。本当はこのままこの地で余生を送れば安泰なのだろう。もういつ死んでもおかしくない歳になってしまったのだから。ああでも旅に出たい。もう一度旅に出たい。別にこのまま帰って来れなくなってもいい。私もあの尊敬する人たちのように旅先で寿命を迎えることができたらどれだけ幸せか。考え出すと止まらなくなってきた。落ち着いてはられないな。早く準備に取りかかろう。すべきことは多い。もう若くはないのだ。行きたい所も多いのだ。今から支度を始めればいつ出発できるだろうか。

死を覚悟してまでも、旅に出たくてたまらないという芭蕉の気持ちを十分理解することができたと考える。

「平泉」の前半では、「先生、今日はなりきるのは書かないのですか。」と問う生徒がいた。彼は『芭蕉日記』が気に入ったようだ。

「平泉」の後半で、旅のしめくくりとして再び『芭蕉日記』を書かせた。「旅立ち」の場面で書いた『芭蕉日記』の幾つかを紹介した後で行った。2回目なので新鮮さには欠けたが、友達の作品を聞くのは良い刺激になったようだった。日頃あまり読み取りを得意としていない生徒の作品を示す。

表3 芭蕉日記3

高館まで登ったとき

伽羅御殿と言われた秀衡の屋敷跡が田や野原になっている……。昔はあんなに栄えていたの

に、なぜこんなことに……。とても悲しい。義経の居館の高館に登ってみると、茫漠としたくさむらしか残っていない。本当は、功名を競った場所であるのに……。考えられない。

「国破れて山河あり。城春にして草木深し。」この杜甫の詩がふと浮かんできた。決して思いだそうとしたわけではない。急に浮かんできたのである。これはもう、この悲しい現実には体はついていなくて、頭だけがついていっているということなのかもしれない……。これからもこのような思いをする場所を旅することになるのだろうか……。

次に読み取りを得意としている生徒の作品を示す。

表4 芭蕉日記4

旅を終えて

あれだけ楽しみにしていた旅も、あっという間に終わってしまった。早かったなあ。しかしこの旅はすごく充実していた。ここで死んでもいいというくらいに強い思いをもって臨んだ旅だったが、その分、すごく貴重な体験ができた。

中でも、あの平泉で見た城は……。もう見るのが辛かった。昔は、あんなに立派で素晴らしかったあの城も……。戦いで何も残っていなかったんだもんなあ……。戦いの酷さや人々の残酷さが身にしみて、すごく心が痛かった。今でも思い出すだけで涙があふれてくる。あの時は辛かったが、やはり死ぬ前にあんな経験ができてよかった。人間の汚い部分を見れたような気がする。今までの自分はすごく無知で、今思うと恥ずかしい。死ぬ前にこの旅を経験できて本当によかった。これで安心して向こうに逝くことができる。人とは、本当に汚く、どこまでも自分勝手な生き物だ。しかし、そんな残酷さを感じることもできる心も持っている。反省し、次に活かすこともできる。人とは、汚く情けないほど勝手であるとともに、美しい生き物なのだ。この旅でそれを感じ

ることができた。私はこの人生に一片の悔いもない。

本文から読み取った芭蕉の心情を中心に、生徒本人の解釈を多く加えた完全オリジナル日記となっている。

また、これらの日記を書き終えた後の生徒の感想は以下のようなものである。

- けっこう難しかったけれど、芭蕉の気持ちを少しつかむことができたので良かったです。
- けっこう昔の人なのに、考え方が大人だから書き易かった。というか、いろいろ想像しやすかった。
- 日記は難しかった。でも、芭蕉になりきってみると、いつもとは違う感じがして楽しかった。
- あらためて芭蕉に気持ちを考えると、とてもよく理解できる部分があった。したいことがあったら何も手につかず、そのことばかり考えてしまうとか、昔のことを思っ泣くほど悲しくなったりとか。
- 芭蕉になりきってみて日記を書いてみると、芭蕉は本当に旅を愛していたんだなと感じました。
- 芭蕉さんが平泉の城跡で涙を流した理由や、その後の自分の思いなどを深く考えてみました。人生を懸けて行った旅では、自分の死も近くに感じ、自分の人生とも照らし合わせていたんじゃないかなあと感じました。

〈第5次 口語訳の書き換えを行い、言葉の効果を考える。〉

「うつくしきもの」の口語訳の書き換えを行った。想定読者対象を「年下」もしくは「一般」と設定し、それぞれにふさわしい文体²⁾は何かを考えて書き換え、場にふさわしい表現を追求し、原文との比較を通して言葉の効果を考えることを目標とした。

書き換えは2回目なので要領はよくわかっていたが、対象を限定したので「ふさわしい文体」を考えることに少し時間がかかった。ただし、そうは言いながらも生徒が本当に対象者のことをどれ

だけ思いやって文体を選択したかは定かではない。ただ単に自分の書きやすいものを選んだ可能性も否めない。それぞれの文体の特徴を理解したうえでの場にふさわしい選択、そして言葉の効果の確認をねらいとしていたが、もっとしっかりと文体の特徴を意識した根拠をあげさせるべきだった。

そして最後に原文を再読し、「枕草子」における文体の特色を考えさせた。いったん自分の手で書き換えた後で読み直すことによって、生徒は改めて、「一文の短さ」や「体言止め」等の効果について考えることができた。

「一般」を対象としたある生徒の作品を次に示す。

表5 書き換え1

俺はね、思ったんだ。かわいらしいものってのは何かってね。それはね、瓜に描いた幼子の顔さ。あとさっ、雀の子がいたんだよ。そしたらさ、人がネズミの鳴き真似をしたんだ。俺はね、わかるよ。目の前にいたらね、したくなるんだよな。そしたらね、踊るようにしてね、そいつの所に行くんだ。なんでそんなにかわいいんだよ。俺の柄にもなくさ、思わずにやけちゃったさ。誰だってそうなるさ。あとさ、2・3歳の子どもがさ、急いではってくる途中でさ、小さい塵を見つけてさ、大人に見せに行くとき。ほんとにかわいいと思うよ。なんであんなにうれしそうなんだろうな。

本文にはない補足を若干加えながら清少納言の気持ちを代弁していると言える。

〈第6次 オリジナル作品を書く。〉

「枕草子」における「ものづくし」一覧表を参考にしながら、オリジナル作品を書かせた。これまでの学習で「ものづくし」においては、生徒の共感を得るものが多く、生徒は「今」に通じる作者の感性を十分に感じ取っていた。

次の作品は日頃「書くこと」を苦手としている生徒のものであるが、「枕草子」の特徴である「一文が短い。体言止め」という点を上手にふまえた作品を作り上げることができた。班で交流した後で教室でも発表したけど、皆の共感を得ることがで

き、本人も満足していた。

表6 オリジナル作品1

ついなんとなく熱中してしまうもの
 つい熱中してしまうもの。電卓で1+1の連打。ストップウォッチをジャスト1秒で止めること。消しカスで練り消しを作ってこねること。指をポキポキ鳴らすこと。シャーペンの解体。自転車から一度も降りずに目的地に着くこと。ステップパワードの図形を塗りつぶすこと。目をつぶってウォークマンの目的の曲を選ぶこと。(後略)

この作品に対する班内評価は以下のようなものである。

- 共感できた。
- 共感することがたくさんあった。おもしろさもあってよい。



図2 班内交流

さらにこの学習を終えての生徒の感想を次に示す。

- 私にとって恐ろしいものとは何だろう。そう思い、日常生活を思い出しました。清少納言もこうやって当時、枕草子を書いたのかと思うと不思議な感じがします。
- 最後に「ああ・・・」って思ってもらえるように書いてみようと思ったものの、あまりうまくまとめられなかった。
- 意外とあっさり書けたんだけど、おもしろさに欠けた気がする。でも、いろいろ考えていく

段階は楽しかった。ただ千年後にはこれは共感されないような気がする。

(5) 学習を振り返って

結論として、芭蕉日記の導入と口語訳の書き換え・オリジナル作品作りは、「書くこと」の活動を通して、読みの深化をはかる授業となったと考える。

各題材における「展開」部分、および「結び」部分での活用であったが、これらの活動を複数回行うことで、生徒は各場面で立ち止まり、言葉を吟味することになり、豊かな言葉の獲得および豊かな読みの出発につながる。

しかしながら、その評価のあり方についてはまだまだ課題が残る。付箋を使った班内交流や全体交流を通して、それぞれの課程で自己評価や他者評価を行った。が、どれも一通りの評価で終わっており、内容に深く踏み込んだものや的確なアドバイスとはなっていない。

3. 考察

これらの授業を行っておよそ2ヶ月後に、3年生を対象に「書くこと」「読むこと」に関する簡単な記述式の調査を行った。(2011/1/24 実施)

以下は、そのまとめである。

表7 国語に関する調査

「読むこと」についてどのように考えているか。	
○ おもしろい。	○ 楽しい。
○ 難しいこともあるが、そこからいろいろなものを吸収できる。	
○ 知らなかったことを知ったり、想像力を広げたりできる。	
○ 人間としての幅を広げるのに役立つ。	
○ 生活に欠かすことのできないもの。	
○ 感受性が高まる。○ 理解していく行為。	
「書くこと」についてどのように考えているか。	
○ 自分が感じたり、考えたりしたことを残しておくことができる。	

- 自分の考えを多くの人に伝える手段。
- 「読むこと」より難しい。
「書くこと」は「読むこと」にどのような影響があったと考えるか。
- 例えば、物語の場面について自分の意見を書くと、次にその物語の場面を読むとき、より深く内容を理解できるようになっているということがありました。だから、「書くこと」はより深く理解することにつながっていくと思います。
- 枕草子のように同じような形式を目標として書くことで、読んだ文章の構成を考えることができた。もし読むだけだったら、構成をあまり意識できなかっただろう。
- 今まで何気なく読んできた文章も、書き手それぞれの「思い」がこもった文章だと知ることができ、より深く読めるようになったと思います。
- 読むときに感想を持ちながら読むことができたような気がします。

調査を行うにあたっては、何の注釈も加えずに記入を促した。

授業においては、教材によって題名の意味を考えたり、作者の主張や心情をまとめたりするなど、さまざまな場面で「書く」。ゆえに今回の取り組みである古典における「書くこと」のみならず、あらゆる場面を想定して生徒たちは、調査に答えたと考える。また、受験前である1月末に行ったので文章構成について、あるいは「書くこと」について若干神経質になっていたとも考えられる。

対象生徒たちは、日頃から文章をよく書き、授業における読み取りも活発に行っていた。しかしながら、やはり「書くこと」に対する苦手意識は多分にあったようだ。

客観的にみれば1回の調査だけであり、取り組みの前後の比較もできず、この記述からだけでは、「読むこと」に対する「書くこと」の影響は計りがたい。しかし、「読むこと」「書くこと」への生徒の意識をとらえるうえでは参考になると考え

る。

さまざまな点を考慮して考えてみても、「書くこと」にマイナス面はない。また、「書くこと」によって、「読むこと」の幅を広げたと考える。

4. 成果と課題

結論として、「書くこと」を利用したことで、「読むこと」に幅ができ、多少の深化があったと言える。ただし、それがどれだけ有効であったかという点定かではない。読み取りの一つの方法として「書くこと」があり、それを行うことで若干の視点の変化があり、普段なら見落とすところに気がついたという程度である。従来の授業の在り方と大差はないが、ほんの少し重点を置くところを変えたことで、そこに「言葉の吟味」が生まれたと考える。今後はその評価の在り方を探り、互いの意見交換を充実させることでその有用感の向上を図りたい。

5. 終わりに

国語科において、「書くこと」「読むこと」は、切り離せない領域であり、どちらが欠如しても国語力の向上は望めない。日常生活においても必要不可欠なものであり、生徒たちもその必要性を感じている。また、「書くこと」「読むこと」を鍛えることは、思考力・判断力・観察力・感受性・表象力などの認識諸能力を増幅させることである。さらなる深化を図りたい。

〈引用（参考）文献〉

- 1) 大熊徹：「読む力と書く力、なぜ転移するのか」、月刊国語教育研究, No. 459, pp. 2-3, 2010.
- 2) Reymond Queneau: 朝比奈弘治訳「文体練習」, 1996, 朝日出版社.